

報告 1 : 磯部美里 (愛知大学非常勤講師)

中国における「タイ医学」の治療実践—西双版纳タイ族を事例として

医療人類学においては、土着の文化から生み出される疾病に関する信念や信条を民族医学と呼ぶ。西洋に源を発する「科学」に依拠したデータや理論で疾病を説明する西洋医学、いわゆる近代医学に対して、近代/伝統の二分法から、民族医学は伝統医学とも称され、これまでさまざまな角度から研究が行われてきた。

本報告が対象とするのは、中国における民族医学である。我々が一般的に中国医学(中医学)という場合、それは日本に伝わった「漢方」の起源であり、人口の約 92% を占める漢民族が中心となって培ってきた医学を指す。しかし、中国では、漢族のほか 55 の少数民族が識別されており、多くは自文化に根ざした病気に対する対処法をもち、これらは「民族医学」と呼ばれ、1980 年代以降、共産党政府公認のもと、資料収集、文献の翻訳等が進められてきた。現在では「民族医学」は、中国医学の一カテゴリーに属す。つまり、現代中国においては、近代医学の普及・浸透の一方、「大伝統」としての中国医学(中医学)と「小伝統」としての複数の「民族医学」が共存している複雑な状況がみられるのである。

本報告では、雲南省西双版纳タイ族自治州に居住するタイ族を事例として当地に伝わる「タイ医学」の治療実践について取り上げる。「タイ医学」は、チベット族、モンゴル族、ウイグル族の伝統医学と並び、中国において「四大民族医薬」に認定され研究も進められているが、当地の人びとがどのように「タイ医学」を継承し、近代医療が普及・浸透する中で「タイ医学」をいかに利用しているかといった治療実践に焦点をあてた研究は、管見の限りほとんどない。また、どれだけの数の「民族医」がおり、治療にあたっているのかといった具体的な統計も存在しない。

そこで、報告者は当地にある 68 のタイ族村落をまわり、各村落の「民族医」数、具体的な治療内容、人びとの利用方法などについて聞き取り調査を行った。本報告ではその調査内容をもとに、当地の「多元的医療体系」について考察を行う。